

教育実践報告

信州大学における特別支援教育臨床実習の新たな取り組み — 地域企業と連携した学校農園プロジェクト —*

小島 哲也・宮地 弘一郎・白神 晃子

A New Approach of Clinical Practices for Special Needs Education in Shinshu University:
School-Farm Project in Cooperation with a Regional Company

KOJIMA Tetsuya, MIYAJI Koichiro, and SHIRAGA Akiko

要 旨

信州大学教育学部ではこれまで、特別支援学校教員養成における臨床実習系カリキュラムの改革に向けた取り組みを継続して行ってきた。特に、学部2年生向けの臨床経験科目「障害児指導法実習」では、障害児の多様な生活実態に触れる経験を通して支援マインドと支援スキルを育成し、その後の専門的学習と教育実習に向けた動機づけを高めることを目的に、実習プログラムの充実を図ってきた。本報告では、2015(平成27)年度に教育学部と地元企業の共同研究として取り組みが始まった学校農園プロジェクトと、同農園をフィールドに活動が行われている臨床実習の概要を紹介し、特別支援学校教員養成における臨床経験の意義と関連する事柄について述べた。

キーワード

特別支援教育 教員養成 知的障害 臨床実習 地域連携

目 次

- I. はじめに
- II. 学校農園における臨床実習の取り組み
- III. 特別支援学校教員養成における臨床経験の意義

注

文献

* 本報告の一部は、平成29年度日本教育大学協会研究集会において著者らが共同で発表した¹⁾。

I. はじめに

信州大学教育学部ではこれまで、特別支援学校教員養成における臨床実習系カリキュラムの改革に向けた取り組みを継続して行ってきた^{2),3)}。従来のカリキュラムでは学生の専門的資質を養うための授業科目群に相互の有機的関連性が乏しいこと、近年の特別支援教育の整備・発展に対応できる教育実践力の強化・育成が求められていること^{4),5)}、等の理由によりカリキュラム改革は重要かつ緊急の課題であった。

特に、専門分野を学び始める2年生が履修する臨床経験科目「障害児指導法実習」(必修2単位)は、障害児の多様な生活実態に触れる経験を通して広い社会的視野を備えた支援マインドと支援スキルを育成し、その後の学習や教育実習に向けた動機づけと問題意識を高めることを目的とするため、実習プログラムの充実改善を優先して進めてきた。その結果、本学部で取得可能な特別支援学校教員免許状(知的障害/肢体不自由/病虚弱)全ての障害種の子どもと関わる活動メニューを複数用意し、その中から学生が自由に選択して履修できる現在の実習体制が整備された。この障害児指導法実習を含めた特別支援学校教員養成コースにおける臨床実習系科目のカリキュラムを図1に示した。

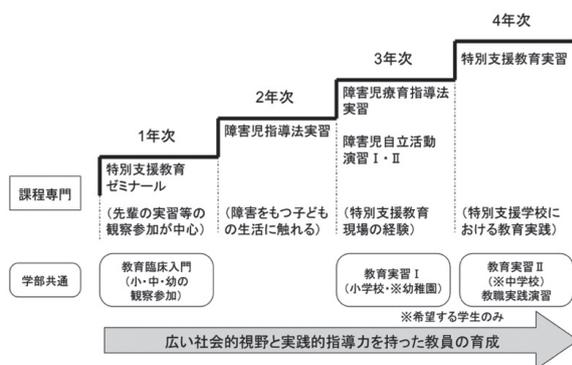


図1. 信州大学教育学部特別支援学校教員養成コースにおける臨床実習系カリキュラム(宮地・小島、2013) 注1,2

本報告では、2015(平成27)年度に信州大学教育学部が地域企業と連携して取り組みを開始した学校農園プロジェクト、および、同農園をフィールドに行われている臨床実習と土曜クラブの活動を紹介する。最後に、特別支援学校教員養成における臨床経験の意義、関連する事柄について述べる。

II. 学校農園における臨床実習の取り組み

1. 学校農園プロジェクト

学校農園は平成26・27年度文部科学省「キャリア教育・就労支援等の充実事業」(受託機関・信州大学教育学部)⁶⁾に地元企業として協力した株式会社平成農園^{注3)}が長野市北堀地区に整備した約20aの圃場である。農園に隣接して長野地区附属学校キャンパスがある立地条件の良さもあり、信州大学教育学部との共同研究(学校農園プロジェクト)用フィールドとして2015(平成27)年4月に利用が開始された。

現在、学校農園では特別支援教育を学ぶ教育学部学生の臨床実習(障害児指導法実習)、附属特別支援学校高等部生徒を対象とする農・食育活動(土曜クラブ)、附属長野小学校児童の体験学習(総合的な学習の時間)という、それぞれに特色のある3つの教育実践プログラムが並行して展開されている。

2. 臨床実習と土曜クラブ

学校農園プロジェクトにおける臨床実習と土曜クラブの関係を図2に示した。土曜クラブは臨床実習の選択プログラム(知的障害)の1つとして週末(9:30~14:30)に行われる。原則として午前中に学校農園の農作業を行い、作業後は附属特別支援学校の生活訓練棟(おひさまハウス)で

食育活動とグループワークを行う。今年度の土曜クラブには高等部生徒7名^{註4}と教育学部学生43名(特別支援学校教員養成コース2年生22名、他コースの副免履修学生21名)が参加した。活動に参加する学生は毎回10名前後だったが、田植え、稲刈り、収穫祭など人手が必要な活動には、保護者やボランティアの方々に応援をお願いした。

活動プログラムの立案と準備、実習学生の指導と支援は、実習担当教員(筆頭著者・小島、非常勤)と学生3名(障害児心理研究室所属4年生)を中心とした事務局スタッフが行った^{註5}。事務局スタッフはファーム職員から農作業全般の技術指導とアドバイスを受け、畑の水やりや草むしりなど農園の日常的な管理を年間通して行った。また、教育学部職員(管理栄養士)と定期的に打ち合わせを行い、食育プログラムと毎回の食事メニューについて指導助言をもらった。

学校農園では4月から野菜と米(低農薬特別栽培)づくりを中心に農作業が始まった。5月の土曜クラブ開校式から12月の修了式まで、田植え、稲刈り、収穫祭等の季節行事、農園産の食材を使った食育活動を含め、計18回の活動が行われた。表1に年間活動計画を、図3~6に主な活動の記録写真を載せた。

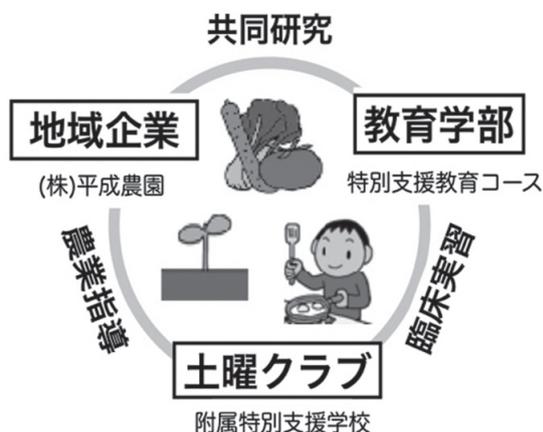


図2. 学校農園プロジェクトにおける臨床実習と土曜クラブ(宮地・小島・白神、2017)

表1 2017年度土曜クラブ年間活動計画

回	月日	主な農作業
1	5/13	開校式、農園見学
2	5/20	ブルーベリー苗木手入れ
3	6/3	スイカ・もろこし苗植え
4	6/10	田植え【図3参照】
5	6/24	水田観察
6	7/1	枝豆種まき、土寄せ
7	7/15	りんごの袋かけ【図4参照】
8	7/22	大豆種まき、ジャガイモ収穫
9	9/2	水田・水路観察、魚採り
10	9/16	枝豆収穫
11	10/7	稲刈り
12	10/21	脱穀、芋掘り
13	10/28	特別企画・食事会【図5参照】
14	11/4	精米、収穫祭準備
15	11/11	収穫祭【図6参照】
16	11/25	大豆・だいこん収穫
17	12/2	大豆選別・豆たたき
18	12/16	豆腐づくり、修了式



図3. 田植え(6月)

学校農園の水田(約4a)で総勢21名が1列になり、掛け声に合わせて手植えを行った。田んぼに素足を踏み入れた時の不思議な感覚にあちこちで歓声が上がった。



図4. りんごの袋かけ(7月)

高齢のため手入れができず困っているご近所の林檎畑をお借りして初めて経験した作業。慣れない手つきだけれど真剣そのもの。



図5. 特別企画(10月)

おひさまハウスでのグループワーク。毎回、昼休みに大学生のクイズや自己紹介を楽しんだ後、学年別に活動のふり返しを行った。



図6. 収穫祭(11月)

10月の稲刈りで収穫した米は総量(粳)で約200キロ。収穫祭でふるまった新米ご飯とおもてなし料理は大好評だった。

土曜クラブでは毎回、昼休み後のグループワーク(約30分)で午前中の活動について振り返りと評価を行った(図5参照)。高等部メンバーが学年別のグループに分かれ、ペア学生と一緒にワークシート(活動の内容や手順、その他の情報を写真とイラストで分かりやすく示した用紙)を用いて活動の振り返りを行った。また、活動への取り組み状況について、評価シート(6項目、4段階評価)による生徒自身の自己評価、学生による他者評価を行った。

今後、活動の振り返りと評価のデータを継続的に収集し、土曜クラブの活動内容の見直し、生徒の作業能力や社会性スキル(集団マナー、対人コミュニケーション、自己統制等)の評価分析に活用する予定である。

Ⅲ. 特別支援学校教員養成における臨床経験の意義

以上、信州大学教育学部の学校農園プロジェクト、同農園を利用して行われている障害児臨床実習と土曜クラブの活動について、概要を紹介した。最後に、特別支援学校教員養成における臨床経験の意義、関連する事柄について述べる。

広々とした農園に同世代の若者が集まり、週末の時間を一緒に過ごす。特別支援教育の教員を目指して大学で専門を学び始めた学生にとって、学校農園における実習活動は楽しいだけでなく、貴重な経験と学びの機会になっているにちがいない。

小島ら⁷⁾は障害児指導法実習のもう一つの選択プログラム「げんきクラブ」^(注6、8、9、10)に参加した学生5名を対象にインタビューによる追跡調査を実施した。障害児の支援活動を通して学生たちが経験する様々な出来事と感情、それらが彼らの行動や意識に及ぼす影響、その変容過程について、時系列モデルによる質的分析を行った。その結果、どの学生も「質の異なる個別の体

験と感情を全体として肯定的に受け入れる」こと、それを「次の段階に進むために必要な『学び』として捉えている」こと、さらに、「学びの到達点として『特別支援教育への興味がわく』段階に至る」ことが明らかになった(pp.215-218)。

学校農園における臨床実習で支援活動を経験する学生にも同様の変容プロセスがあるとすれば、どのような体験と学びがあるのだろうか？ それは、その後の学習への動機づけと問題意識を高めることに繋がっていくのだろうか？ 教員養成における臨床経験や教育実習の影響を分析した最近の研究成果^{11), 12), 13)}を参考に、今後さらなる検討が必要である。

一方、土曜クラブに参加する高等部の生徒たちにとって、学校農園における活動は、週末の余暇利用、地域における学習機会と社会参加、卒業後の就労と生活自立など、様々な側面において一定の役割を果たしていると思われる¹⁴⁾。近年、自然や土に触れその中で育まれる生命に向き合う農業の可能性＝潜在的治癒力に注目し、障害児・者の学習活動や生活支援、リハビリテーションに農作業を積極的に取り入れ成果を上げている事例が数多く報告されてきた^{15), 16)}。これらの成果はこれまで農福連携の視点で議論されてきたが¹⁷⁾、学校農園プロジェクトにおける土曜クラブの今後の活動のあり方や可能性について議論する場合、特別支援教育を含む3領域(農福学)の連携を視野に入れた多角的検討が必要になるだろう。

さて、小島の勤務する松本大学では2017(平成29)年4月の教育学部開設を機に、特別支援学校卒業生の働く場の拡大等に取り組む部門(社会進出支援センター)を設置した。文部科学省の平成29年度学校基本調査¹⁸⁾によると、平成28年3月時点の知的障害特別支援学校高等部卒業生(公・私立計17,754名)の就職率は全体の32.1%(5,707名)で、昨年度より若干増加したものの依然として低いレベルに留まっている(社会福祉

施設等入所・通所者は計11,008名で全体の62.0%を占める)。社会進出支援センターでは現在、こうした現状と最近の動向¹⁹⁾をふまえ、学内における障害者雇用、地域の障害者の就労支援を推進するための事業計画を策定中である。今後、信州大学の地域連携と学校農園プロジェクトを先行モデルとして参考にしつつ、地域密着型大学²⁰⁾に求められる課題解決と新たな課題発掘に向けた取り組みを行う予定である。

謝辞

本報告をまとめるにあたり、学校農園と土曜クラブの活動にご協力ご支援をいただいている株式会社平成農園、同へいせいファーム、信州大学教育学部、同長野地区附属学校の関係者の皆様に、心より感謝いたします。

注

- 注1 特別支援学校教員免許を取得する学生は、小学校教員免許取得のための学部共通科目(教育臨床入門、教育実習Ⅰ、教職実践演習)の履修を基礎要件とし、その後さらに、コース専門科目(特別支援教育ゼミナール、障害児指導法実習、障害児療育指導法実習、障害児自立活動演習Ⅰ・Ⅱ、特別支援教育実習)を履修する必要がある。
- 注2 知的障害、肢体不自由、病虚弱の3障害に関わる複数の選択プログラムを提供している障害児指導法実習では、単位認定(通年2単位)にポイント制を導入している。選択したプログラムで活動認定ポイント(原則、約2時間の活動で1ポイント)を年間合計12ポイント以上取得し、最終活動レポートを提出した学生のみ単位認定の対象となる。土曜クラブでは年間3回の活動参加を条件に最大8ポイントまで認定している。
- 注3 平成農園は総作付け面積約11,200aの農業生産法人で長野市農業公社地域ブランド「ながのいのち」推進協議会の設立メンバーでもある。協議会会員が栽培・加工した農産物を定期的に届ける移動販売車「ひっぱりだこ号」の運営に携わり、いわゆる買い物難民を対象にした巡回運行も行っている。2016(平成28)年9月、農林水産省都市農業機能発揮対策事業補助金を受け、六次産業導入型福祉農園(へいせいファーム)を長野市小島地区に開設した。同ファームでは、専用圃場での特色ある地場作物の栽培、付設作業所における加工・パッケージ化等の一連の活動を通して、障害のある方々に農業体験や就労支援の場を提供している。
- 注4 土曜クラブに参加した高等部生徒は全員男子で、1年生2名、2年生3名、3年生2名であった。いずれの生徒も知的障害があり、ダウン症の重複が3名、自閉症スペクトラム障害の重複が3名であった。こだわりや問題行動を示す生徒も数名いたが、全員、指示理解は良好で対人的コミュニケーションに大きな困難はなく、初対面の学生とのペア活動に著しい問題は生じなかった。
- 注5 小島は4月の授業ガイダンスで、臨床実習の目的、学校農園と土曜クラブの活動内容を学生に伝え、高等部メンバーのプロフィールも簡単に紹介した。実習当日の活動前ミーティングでも、ペアを組む生徒の特性と配慮点を担当学生に伝えたが、活動中は細かな指示や注意を避け、距離をおいて見守り、作業の自立を支援する気持ちで関わることを伝えた。
- 注6 附属特別支援学校で行われるげんきクラブは2009(平成21)年度に選択プログラムとしてスタートした。実習学生はPTA主催の放課後活動支援事業の支援スタッフとして参加し、知的障害や発達障害のある児童生徒の遊びや運動など、

各種プログラムで個別支援を経験する。実習を通して学生たちは実践的指導力、コミュニケーションスキル、チームワーク力を向上させるとともに、その経験と学びの内容を積極的に学外へ発信してきた。

文献

- 1) 宮地弘一郎・小島哲也・白神見子. 地域企業と連携した学校農園プロジェクトの活動成果と意義～信州大学教育学部における特別支援教育臨床実習の新たな取り組み～. 平成29年度日本教育大学協会研究集会ポスター発表. (2017)
- 2) 小島哲也・宮地弘一郎・永松裕希. ほか. 放課後支援事業を活用した学部-附属特別支援学校間連携による共同研究(1) 教員養成における臨床実習系カリキュラムの改善と体系化の試み. 平成22年度日本教育大学協会研究集会研究発表. 発表概要集, pp.76-77. (2010)
- 3) 宮地弘一郎・小島哲也. 信州大学教育学部における臨床経験科目の新たな取り組み:附属特別支援学校と連携した実習活動の成果と意義. 第29回日本教育大学協会全国特別支援教育研究部門合同研究集会研究発表. 発表概要集, p.53. (2013)
- 4) 文部科学省. 発達障害のある児童生徒等への支援について(通知). (2005)
- 5) 文部科学省. 特別支援教育の推進について(通知). (2007)
- 6) 信州大学教育学部附属特別支援学校. 「文部科学省キャリア教育・就労支援等の充実事業」報告書. (2016)
- 7) 小島哲也・宮地弘一郎・土井田知広. ほか. 特別支援学校教員養成における臨床経験の意義:附属学校での実習活動による学生の経験と変容過程の分析. 日本教育大学協会研究年報第34巻, pp.211-220. (2016)
- 8) 高橋奈津子・谷口実紗子・小島哲也. ほか. 附属特別支援学校における放課後活動支援事業「げんきクラブ」の実践活動:私たちは学生として何を求め何を学んできたか. 第28回日本教育大学協会全国特別支援教育研究部門合同研究集会ポスター発表. (2011)
- 9) 長坂朋美・皆瀬咲・宮地弘一郎. ほか. 附属特別支援学校における放課後活動支援事業「げんきクラブ」の実践活動:私たちは学生として何を求め何を学んできたか(その2). 第29回日本教大協全国特別支援教育研究部門合同研究集会ポスター発表. (2013)
- 10) 小田切美紗・久保春香・宮地弘一郎. ほか. 附属特別支援学校における放課後活動支援事業「げんきクラブ」の実践活動:私たちは学生として何を求め何を学んできたか(その3). 平成26年度日本教育大学協会研究集会ポスター発表. (2014)
- 11) 菊池哲平. 教育学部学生における発達障害のイメージ・接触経験・知識との関連. 熊本大学教育実践研究, 28, pp.57-63. (2011)
- 12) 木内美恵子・島田英昭. 教員養成課程における臨床経験科目が教職志望意識に与える影響:半構造

- 化面接と時系列分析による検討.教育実践研究, 13, pp.31-40. (2012)
- 13) 伊藤理絵・堀江まゆみ・佐久間路子. 特別支援学校教育実習および模擬授業体験学習によって促進される障がい理解について—質問紙調査の結果から—. 白梅学園大学教育福祉研究センター研究年報, 20, pp.34-46. (2015)
 - 14) 文部科学省生涯学習政策局. 障害者の生涯を通じた多様な学習活動の充実について(通知). (2017)
 - 15) 濱田健司. 農業生産分野における障がい者雇用モデルに関する研究.共済総合研究, 60, pp.128-145. (2010)
 - 16) 三森裕. 農業における障害者就労の事例と特別支援学校における農業に関する取り組みの状況について. 現地農業情報—農, 294, pp.1-89. (2014)
 - 17) 小柴有理江・吉田行郷・香月敏孝. 農業と福祉の連携の形成過程に関する研究:農業分野における障害者就労を事例として. 農林水産政策研究, 25, pp.1-17. (2016)
 - 18) 文部科学省.平成29年度学校基本調査(確定値)の公表について. (2017)
 - 19) 厚生労働省職業安定局. 「障害者の雇用を支える連携体制の構築・強化について」の改正について(通達). (2017)
 - 20) 住吉廣行(編). 健康な地域づくりを目指して. 松本大学出版会. (2008)